鶴谷学館を

辞めたの？辞めさせられたの？

佐伯時代の独歩と信仰

戸山恵子
（会員　佐伯市匠南区）

十一月二十三日、今年も「独歩も愛した教会」のキャッチフレーズで、フリーマーケットが行われました。なんでも戦後の物資のない時代から脈々と行われているらしく、ご近所の方々のさし入れや、定番のカレーには、独歩の恋人たちにちなんで「トミさんカレー」とネーミング。「豊後の国佐伯」寿司はあっというまに完売。子供コーナー「六さん」は手作りのおもちゃやゲームを子どもたちが売り、なかなかのもの…。年に一度のにぎわいに百十二年前の独歩が見たら驚くでしょうね。

でも、うちの教会、当の独歩に関しては案外？冷やかなんですよ。それは、当時の有力な教会の担い手でもあった若い信者たちを、独歩が四人も引き抜いて上京してしまったことにつながるのでしょうか。その内二人は病死したという事実も暗い影を落としています。

独歩は、佐伯に来る二年前、今の早大の学生であった頃、東京の一番町教会の植村正久牧師から洗礼を受けています。教会籍はそのままにして、佐伯の教会では客員にすぎなかったので、当時の教会員の名簿には彼の名前を見ることはありません。客員とは字のとうり、お客様気楽な身分でしたが、彼が佐伯にいた十ヶ月間は、まるで嵐のような教会ではなかったかと思われるのです。よくいえば活気が、悪くいえば、まぜくりかえされた？と想像することができます。

さて、その独歩の信仰ですが、人が人の信仰をあれこれおし計るモノサシは持ってはいけないのですが、あえて他人（独歩）の信仰について意見をのべさせてもらうとしたら、それは彼のとった行動に出ていたではないかと思います。

人は、苦境に堕ちた時、または落とされた時、どうするのか…。人間という字が示すとおり、人と人との間には、どうしようもない誤解とか偏見とかが生じ、それが

長引くと、自分でも処理できないことも起こることがあります。このどうすることもできない異変が生じた時に、どういう行動をとったかが、キリスト者としての信仰の尺度だと思うのですがどうなんでしょう。

独歩は十ヶ月にもならない教員生活を、佐伯の人々によって辞めさせられました。（あえてこう表現させて下さい）このことは、案外知られていないようで、言及されたことはあるのでしょうか。いきさつは「欺かざるの記」に書かれ、佐伯史談でも故山内氏により詳しく紹介されています。

つまり、キリスト教対アンチキリスト。もっと下世話にいうなら、独歩が教会に通う生徒たちをひいきしている、そして、独歩を推薦してくれた郷土の英雄、矢野龍渓氏を、公の場で批判した。それに加えて、彼の教育方針に対する不満、こんなことがまぜこぜになって、独歩排斥運動が着任して四ヶ月後には起こっています。二月十日の朝、下宿先の庭の木にぶら下げられていた「勧告状」から事件は始まります。いえ、これはきっかけにすぎず、十月二十一日に教会に出席した時から始まっていたのです。

そのことだけを追って独歩の生活をおってみてみると左の表のようになります。

日　時	できごと（主に富永日記より）
1893年（明治26年）9月30日	佐伯に来る
10月17日	佐伯に教会があることを知る
10月21日	初めて教会に出席
1894年（明治27年）2月10日	勧告書事件
2月17日	益友会でトラブル
2月26日	生徒のストライキ
3月 8日	欠勤・夜教会で集会
4月27日	上京を決意
4月28日	親しい生徒と上京の相談
5月11日	〃
6月19日	辞職願いを出す
7月22日	最後の上京相談
7月29日	佐伯教会最後の出席
7月30日	鶴谷学館辞任
8月 1日	佐伯を去る

週に四回程度、熱心に教会に通う

独歩が佐伯の鶴谷学館の英語教師として来ることになったいきさつは〝お金〟のためで、佐伯出身の矢野龍渓が友人の徳富蘇峰に依頼していたもので、当時、経済的に困っていた独歩の就職先にと斡旋されたもので、独歩

自身にとっては、まさに"縁"としかいいようのないタイミングだったようです。従って、生活のための佐伯行きであり、あくまで彼の心は東京にあったことも頭の中に入れて、排斥運動中の彼の行動を追っていく必要があると思います。

当時の教会は、佐伯のキリスト者第一号でもある、関西学院神学部卒業の薬師寺育造宅に置かれ、会員は十二名ぐらい。(今年の九月、育造の姪・美喜さんが亡くなり、彼を知る人はいなくなりました)そのほとんどが鶴谷学館の生徒でした。生徒といっても社会人も多く、富永徳磨のように小学校の教員や郵便局員もいて、授業は午後から夜間にかけて行われていたらしいのです。総数三十人ぐらい。独歩と同じくらい、あるいは年上の生徒もいたかもしれません。

その生徒数名らと、週に四回、聖書会・祈祷会・感話会、そして礼拝に出席していたというから驚きです。なぜ驚きかというと、現代人の私からみれば週に一度の日曜礼拝さえ、公私の用事、さらには佐伯人特有の"よだきい病"があり、なかなか実行できないまま三十年以上たつからです。当時の教会は、異国の文化にふれる唯一の社交場であり、若くて少しばかり勉強している人にとってはうってつけの場所が教会。要するに戦後の歌声喫茶やダンスホール(こんなたとえは両方に失礼かな)の役割もになっていたのでしょう。今から三十五年前、高校生だった私でさえ、宣教師の焼くクッキーやケーキに遠い外国の香りをかぎ、英語を話すガイジンさんに畏怖の念をいだきクリスマスの意味を教えてもらった時のショックをおもうと、百年前の若者たちは、どんなにか胸おどらして異文化と接したんだろうと思います。

けれども、独歩たちが教会へ通えば通うほど、それをこころよくおもわない人達も増えていったのです。それはあたりまえの現象かもしれません。公私の区別なく親しくしていれば…。

鶴谷学館の教師、さらに生徒が、独歩対アンチ独歩派になっていったのです。

さらに学館の生徒が主になって「益友会」というものを組織して、土曜日ごとに、演説会・討論会を行い、「益友」という雑誌を出していました。教会とは別のサロンがあったんです。その席上、例の勧告事件のすぐあと独歩がやってきて、自分にも言わせろ、いや言わせないと

いう衝突があり、独歩がおこって帰ってしまうということが起きています。その前の会では、独歩が矢野龍渓を批判することを言って青年たちをおこらせているのです。さらにその数日後、主に下級生がストライキ（学校をやめる）を起こし、これにはさすがの独歩も当惑したようです。独歩が辞めなければ、自分たちが辞めるといい実行しているのですから。このへんのところは「欺かざるの記」に詳しく、又「佐伯での若き日の独歩」小野茂樹氏の本にわかりやすく書かれています。さらに昨年冬に偶然？古本屋で"富永徳麿記念文集"にめぐりあい、店主に拝むようにして？譲りうけた中にも、佐伯でのできごとが記されていました。

独歩排斥運動の首謀者は、独歩とキリスト教をきらった青年たちですが、さらにその背後に同僚の漢学の教師、さらには、この騒ぎに何の行動もおこさなかった館長と幹事の二氏も間接的に追い出しに関わったのは事実でしょう。こうしたアンチ独歩派が増す一方で、独歩派の七、八人の青年たちは、ますます固く結びつくように追い込まれ、何度も何度も集まり、話し合いを重ねていきます。そして出された結論が"辞任"。それも、独歩を慕う生徒をひきつれての上京という行動に出ました。これはもう分裂を通りこして反乱です。辞めるのなら自分一人で辞めるべきです。みなさんはどう思われますか？

さて、これらの独歩の行動をみてきて、おかしなことに気付きます。困難に遭った時、苦境に立った時、彼の信仰がちっとも働いていない事実です。聖書を読み、祈り、行動しているとは思えないのです。佐伯にいる十ヶ月間、特に排斥運動がおこってからの六ヶ月間をみても、追いつめられているにもかかわらず、「欺かざるの記」を一日一日調べても、一行たりとも、神に祈り聖書の言葉を受け入れていないのです。ナシカ！

そうです、クリスチャンは、一つや二つ、いや十も二十も聖書の言葉は心の中心にあるものです。ただ、好きな言葉としてではなく、魂の支えとして、その聖書の言葉は彼のどの本にも見あたりません。（私が読んだかぎり知らない）独歩は本当に聖書を読んでいたんだろうか…いや、持っていなかったんじゃないの？…と思うくらい聖書のことは出てこないのです。週に四回も教会に通い、時にはみんなの前で感話もしている彼が…です。

《結論》

独歩はキリスト教が好きだった。洗礼を受け、熱心に教会に通い、神の存在も知っていました。でも、彼に足らないものは、イエスと個人的な出会いがないこと。自分のこととして十字架や復活を信じていなかったんじゃないのでしょうか。

神の偉大さを宇宙にたとえて理解していた独歩。でも信仰って理解するものじゃなくて受け入れるもんなんですよね。

さらに、見習うべきはイエス一人。イエスと共に歩むのが信仰生活。イエスだったらどうするか、それを常に頭において行動する。ただし、そうもいかないのが人間の悲しさですよね。だからその時は祈る。静かに。

”静まって、私こそ神であることを知れ“

旧約聖書・詩編四六の十

ちなみに私は聖書のこの言葉が一番好きです。

”恐れるな、私はここにいる“

新約聖書・マタイ十四の二七

これも好きです。

人間、困難な中では「静まる」のが一番賢い身の処し方。そう教えてくれたのは、イエス自身です。だって、神のみがすべてを知っているのですから…バタバタする必要はありません。その点、独歩のとった行動は破天荒ですね。自分を慕う生徒をひき抜いて、一つの組織を分裂させてしまったんですから…。その後の鶴谷学館の混乱ぶりを想像すれば申しわけないくらいです。（明治三十三年に閉校）

ただし、独歩も若く、佐伯に来たのはお金のためだったこと、佐伯の人たちも、キリスト教に対する偏見があったこと、結果的には、辞任届けを受理した鶴谷学館幹部の方々、ひいては佐伯の上層部の方も、追い出しに加わったとみていいでしょう。両方、いいぶんはあったと思います。なんでもそうですが、トラブルが起きた時は、両方をよんで、複数の立ちあいで話を聞くことが大切です。独歩も当時の佐伯人にも、それが欠けていたのでしょう。

独歩は佐伯の自然は愛したけれど、それは、佐伯の人々から受け入れてもらえず、自分からも受け入れようとしなかった裏返しのようです。日記の中にも、田舎（佐伯）の人をバカにした書き方がいっぱいでてくるし、

教会に通う数名の生徒とだけ親しくなっているからです。そして、よく教会には通ったけれども、かんじんの信仰はお留守だった、そう思えます。自分の居場所としての教会はいごこち良いものだったけど、そこでイエスには出会ってナイ?のです。

《おわりに…》

独歩と共に上京した四人の内の一人、当時二十歳だった富永徳磨は、その後、日本のパウロといわれるほど偉大な牧師となりました。その彼から、一九一九年（大正八年）八木重吉が洗礼を受けました。神様と共にある静かであたたかい詩をたくさん作っていて、今でもファンが多い方です。それをおもえば、独歩が佐伯でひきおこした事件も、すべて神様のご計画だったのでしょうね。やはり他人の信仰なんて計りうるものではないということでしょうか。

富永徳磨を支えた妹トミさんは、最晩年を私の教会ですごし、最期は佐伯老人ホーム（敬愛園）で息をひきとりました。佐伯時代の独歩の恋人といわれた方です。私が中学生の頃、お見舞いにうかがった時は、寝たきりの小がらなおばさんで"あの縁談は、兄が勝手に断ったんですよ。知らないまに…" と言っておられました。一生を独身で、兄と兄の仕事を支えたトミさん、彼女と結ばれていれば、後の数々の作品は生まれなかったかわりに、おだやかな家庭と静かな信仰生活があったのかもしれません。

若き日の独歩が、佐伯でひきおこしたできごとを知れば知るほど現代にも通じて、反省させられます。

"先入観" "色メガネ" 独歩も佐伯人も、そして今の私達にもこの二つにまどわされてはいけないことを学びました。それこそ温故知新ですね。

今年も、独歩も愛した教会で、静かなクリスマスをむかえます。

十二月二十日記